無題(仮・第二章)

中根　辰榮

《お知らせ》

本作品における旧仮名遣いは、前章で用いた基準を用いることとします。

近現代における、学術的研究に基づいた正しい旧仮名遣いと若干の差異があることがございますが、何卒ご了承ください。

※※※

父のＰＣを打つ速度が、ここ数日異様に早い。
「ただいまー」
の一言を言うや否や、居間に資料をばっ、と広げてコンセントをぶっ挿してＰＣを起動させる。
その起動の合間にすら資料にかじりつき、目で文字列をなぞり、目が留まったと思ったら手元の赤ペンで文字列の右にインクを擦りつける。
「お父さん」
夕飯を並べたい机を、Ａ判Ｂ判の紙資料が埋め尽くしている。髪をくしゃつかせながら、またペンで書きこんでいる。
「お父さん！」
「あっ！？」
「夕飯置けないんだけど。もう七時だよ」
「ああ、ごめん……。今退けるから」
ここ数日、夕飯前のルーティンになってきている掛け合い。
「忙しいのは良いけど、こっちにまで迷惑かけないでよね」
白い長方形の束を掴み上げ、急いで父が自室のある二階に上がっていく。すぐにどたどたと戻ってきた。
今日は出来合いのものにした。いただきます。
「ごめんね、今日出来合いばっかで。昨日まで部活忙しかったから疲れちゃって」
「いいよ。買ってきてくれただけでもありがたいし」
「あんがと」
「こっちこそわりぃな。家に仕事持ちこみたくないってのは、俺も思ってるんだけどさ」
「分かってる。取材の準備、忙しいんでしょ」
「うーん。まあな」
「原稿締め切り、いつなの」
「来週の火曜日」
白米をぱくつく。
「そっか。無理せんでね」
「ああ」
お互い疲れていたからか、この後会話も無く、ごちそうさま。
「食器とか片しとくね」
「ありがとう」
どたどたと階段を上がっていく。ばたんと書斎の戸が閉まる。
シンクに溜めた食器に向かい合う。さあて洗うか。
この前行った最初の取材では、あんまり成果が得られ無かったらしく、
「当面の間は、記憶喪失の概要とか、発症のプロセスで回数増さなくちゃいけないかなあ」
とぼやいていた。
「まあそんな最初から成果が得られたら、記者が大儲けできる職になってるわな」
と笑ってた。
洗剤がなくなりかけてる。週末、買いに行かないと。
……記憶喪失、ね。よくもまあテキトーに、こんなシリアスな話題を取り上げてしまったもんだ。曲がりなりにも、ウェブ版が出てる名の知れた雑誌に掲載するのには確かに良かったのかもしれない。
けど、知識なしの状態から早速連載よろしくねと言われたのが半月前。連載初回の締め切りがあと五日。無茶にもほどがある。まあ、選んだ父自身に責任があると言わざるを得ないけど、にしても。
「がんばれ」
エンターキーをたたく音が僅かに聞こえた。
食器洗いを終え、机にあるスマホを確認する。通知なし。ロックを解除し、ニュースサイトを開く。
「米国物理学会騒然　教授謎の失踪」
教授が失踪、まるでＳＦ小説の冒頭みたいに思えた。
「現地時間の七日午後以降、アメリカの物理学界は焦りを隠せない。マサチューセッツ州にあるアムヘルスト大学に在籍するジョン・カーター教授が、現地時間六日昼頃以降、行方不明となっている。
ＣＮＮによると、カーター教授の所属する研究室の関係者が六日昼頃にカフェテリアで昼食をとっているのが目撃して以降、夜になっても自宅へ戻らず、さらに携帯電話へ時間を分け何度も電話を掛けたものの、応答がなかったという。その後、警察や関係者らが教授の研究室を調べたところ、『今日(六日)は休みをいただいておりますので、明日の二時限目には間に合うかと思います』とのメモ書きが残されており、七日の二限開始までに教授が戻るかが心配された。結局教授は現れず、願い虚しく不安は的中した結果となった。
その後、すぐに警察へ失踪届が提出され、広範囲にわたる数百人体制での捜索が行われる予定である。教授の妻は『最近何かを研究していたようなんですが、昔から家の中では研究の話を避けていたので、最近の研究はよく知らない。学会や家族のためにも早く見つかることを願うばかりである』とＣＮＮの取材に対し答えている。
（玉上　耕司）」
この教授の名前、この前どっかのテレビで特集してたよ

うな気がする。ちゃんと見てないから、内容は思い出せないけど。研究に追われ続けるのも、やっぱり嫌になるのかもしれない。そんな人が、今丁度二階にいるから何となくだけど理解しやすかった。
　天井を隔てた向こうで、着信音が鳴った。二コール目の途中で途切れた。
「はい赤江です。……はい……ええ……ええ、期日までには大丈夫ですので。……あ、次の取材は来週木曜日です。……はい、よろしくお願いします。それでは。」
編集長だろうか。予定とかの織り合いを付けるのも大変そうである。
「大人ってやっぱ大変そう」
一瞬自分もそうなっていくんだぞ、なんて突っ込みかけて、つらいから無しだとぶった切る。
　立ち上がり、冷蔵庫の麦茶を取りに行く。ささっと済ませてテーブルに戻った。カップを置いて、ソファ上に寝そべる。ふと、腰辺りに固いものが触った。
「あ」
ICレコーダーだった。父のに違いない。案の定、背面にテプラで作ったネームシールが貼られていた。
無意識に、最新の録音を指が再生させた。
(……自分の生まれなどに覚えはありますか。……)
父親の声が響く。
(……あそこで語ったこと以外、相変わらず思い出せません)
若々しい声。これが例の記憶喪失者らしい。
(では、出演以降、思い出すことが出来た記憶はほかにありますか)
(……テレビで言ったことが、より鮮明になったというか)
(というと)
(まず、自分は生まれが農家であると言ったことなんですが、山あいで小規模の農家を営んでいたと思います。あと、実家を出て働きに出てたことについても、その家からすごく離れた所へ出稼ぎをしていた……と。すみません。アイマイモコとしすぎてますよね)
(気にしないで。記憶は徐々に戻るものですから)
(はい。……あと)
(なにか?)
(何と言いますか。ひどく暑い環境にいたのも、何となくですがそうだったと思います)
(気候が暑い場所へ出稼ぎに出てた、と)
(はい)
録音を止めた。
　暑いところにいた、って言ってたけど、そうなると九州とかかもしれない。他には盆地もありえそう。今言ったところは夏が異常に暑いから、それを思い出したのかもしれない。農業をやってる家だと、冬に出稼ぎに出ることもあり得る。そうなると、実家は豪雪地帯かもしれない。
「おまえ、何聞いてんだよ」
　びくつく。振り返ると、二階にいたはずの大人がそこにいた。
「ご、ごめん……」
レコーダーは取り上げられ、上着のポケットに滑り込まされた。
「他の人にはバラすなよ、いいな」
「う、うん」
こくこくと頷く。
髪を掻いて、一瞬唸る。
「気になったか」
「え?」
「記憶喪失の話だよ」
冷蔵庫に向かいながら、父親が訊いてくる。
「……少し」
水出し紅茶の容器を取り出してやってきた、シンク脇から洗ったカップを二つ取り出しながら。
「この話、本当に誰にも言うなよ。ご飯のお金はおろか、生活費が消えっちまうから」

※※

　喋ってしまった。娘とはいえ、やっぱネタバラシはまずかったかもしれない。
たしかに娘は真面目に取材の話を聴いていた。しかも
「山田さんの居所、雪の多い所じゃないかなって」
だの、
「出稼ぎは九州とかじゃないかな」
と、取材者である自分が気付かなかった点を言われてしまった。不覚。不覚!(結局、それを取材中の話に使うかもしれないけどいいか、と頭を下げた)
　まあとにかく、今回分の原稿はとりあえず区切りがついた。結局この企画は隔週での連載になった。回数は、現状六回を予定している。もう二回分が終わってしまう。次は六月二十九日。少し余裕を持たせて終わらせることができた。
　だが、ここに来て思ったことが一つある。確かに、記事を書くためという大義名分があるとはいえ、俺はこのまま彼の記憶を取り戻す手助けをしていいのか。記憶喪失の要因として、無意識下で脳が特定の記憶を抑圧する

ことで、心身の健康を保とうとする場合も少なくないという。もし、山田さんがそれによって記憶を閉ざされているのなら。

私は彼を殺してしまうのではないか。

だが、私にも記者としてのプライドがあって、連載を責任もって続けていく必要があるのは言うまでもない。曲がりなりにも、これで長い間食ってきたんだし、家計の支柱にもできている。

だから、私は書かなきゃならないんだ。

※

自分の文言が、他者に見られる。少し気恥しく思はれるものだ。けれども、私の暗闇に少しでも灯をもたらしてくれる何かが現れるのなら、という思いが勝った。

「来週には記事を載せた雑誌が発売されますので」

発売されたら確認のために一冊送ってくれるさふだ。

――取材の終了後、赤江さんと少し話し込んだのを思い出す。

「赤江さん」

「はい？」

取材に必要な用具を仕舞ってゐた。

「……家族と云ふのは、赤江さんにとってどういうものですか」

我ながら、とても難しい質問をしたと思った。何事に対しても、価値観を問うのは答へに窮してしまうのは、至極当然であるはずだ。

案の定、用具を片付けながらも赤江さんは得も言はれぬ表情を浮かべてゐた。

「嗚呼……少し、時間を下さいませんか。否、言葉にするとなると、口が回らなひものですな」

「すみません。あんまり気になさらず」

「またお会ひする時にお答えするので良ひですか」

結局、約束はしたものの、はっきり言へば忘れて貰っても構はなかった。何せ、自分の答えが分からなひのに訊いてしまったのだ。取材で多忙なのに、幾分か申し訳なひ事をした、と今思ふ。

戸を叩く音がした。

「(山田さん、後藤です)」

館長のくぐもった声。戸を開ける。

「だふも。何か」ご用ですか

「さっき、赤江さんから電話があったので連絡に」

戸籍の問題上、僕は未だに「けいたいでんわ」を持っていなひ。そろそろ申請が通り、山田浩平の戸籍を申請する書類が来るらしい(注1)。その間、館長が電話応対をしてくれる。

「取材は正式に来週木曜日の午後二時からで宜しくお伝へくださひ、ですって」

「分かりました。態々有難ふ御座ひます」

「いいんですよ。でも、無理はなさらないで下さひね」

「ご心配なく」

「ぢやあ」

「だふも」

……一週間も空かずに来るのか。確かに、隔週での掲載であれば致し方なひはずだ。記者といふものも、本当に大変さふだと思わずにはいられなかった。まあまあ多い頻度で会うことになる赤江さんだが、それを未だ嫌だと思う事はさして無ひ――一度会ただけだと言はれれば確かにさふだが――。物腰の柔らかさ、話してゐて垣間見える謙虚さ。ああいふ人が記者として上手くいくのではと思ふ。

……さふいえば。

取材の後と云ふもの、記者の顔が、だふしても忘れられなひ。遥か以前、何処かに見覚へがある。……気がする。根拠を聞かれれば其れ迄だが、かと言って否定する気にもなれなひ。秘密の領域に、私の知らなひ私の領域に、赤江さんが、彼がいる様な気がした。

※※

都心で運転するのはいつになっても慣れない。首都高を走らなければならないとなると、聞いただけで肝が冷える。あんな細い道幅のくせにためらいなく飛ばす車は多いし、そもそも混雑が多発してるし。何が首都の大動脈だ、聞いて呆れる。動脈硬化が多発して、時代が経つにつれて悪化してるじゃないか。

ラジオからは腫瘍の箇所と規模が流れてくる、ここから十キロ先で事故渋滞があるとのことだ。

「まずいな」

山田さんとの取材予定時刻が、刻一刻と迫ってきていた。あと一時間。ギリギリになるかもしれない。確かに遅れないだけましかもしれない。こういう時には、いつも早めに動くようにしていたのが幸運だった。だけど前回は予定時刻よりだいぶ前についていた。一応連絡した方が良いか。

「ええっと」

渋滞で動かないのを見計らって、ブルートゥースで車のオーディオに携帯電話を繋げば、簡単に電話できる。紅

羽がいつだか、家の車で使い方を教えてくれた。時たまこいつにはお世話になっている。
　案の定渋滞が始まって、あっという間に動かなくなった。パッパと接続して、車が動かないうちに山田さんの施設に電話をかける。二回コール音が鳴って、繋がった。
「はい、福祉保健センターです」
「もしもし、こちら南西出版の赤江と申します」
「ああ赤江さん。館長です」
「あ、どうも。すみません、あのお、今ですね」
「はい」
「高速道路でそちらへ向かってるんですが」
「ああはい」
「事故渋滞にはまってしまいまして」
「ええ」
「もしかしたら少し取材開始が遅れるかもしれないのでご連絡を、と思いまして」
「ああそうなんですね。わざわざありがとうございます。山田さんにはその旨をお伝えしておきますので」
「あ、ありがとうございます。申し訳ございません」
「いいえ。事故渋滞なんてざらじゃないですからね」
「ほんとすみません、ありがとうございます。それではまた付きそうになったらお電話します」
「わかりました。お待ちしております」
「はい、失礼いたします」
いや助かった、まじで助かった。先方に失礼があったら連載トぶ可能性もあるから、やはりまめに連絡をしておくに越したことは無い。
　しかし、この記事に対する矜持というか、押し方というか、この記事に対してものすごく大きい責任感を抱いていた。正直自分でも気持ちが悪いくらいだ。
　だが何故だか落とせない。けなしては決してならない。そう強く思わせる「何か」がくっついて離れない。そしてこいつは、当面の間離れてくれそうにない。

※

　赤江さんは遅れてくるらしひ。先程、館長さんから言伝てを頂ひた。
「赤江さんは渋滞で遅れるさふですので、宜しく御願ひしますね」
　何度か都心に行つたが、人の喧騒で余りにも混沌としていて、加えて、駅は迷宮。帰り際、警官に幾度となく世話になつた。何せ、出入口が多すぎた。A弐〇番出口まで来て下さひ、と言はれて吊下げの看板に従つて行つたにも拘らず、記号も番号も全く違ふ出口まで行き着ひた。結局歩ひてゐた警官を見つけ、行き方を地図も使つて説明してもらふ羽目になつた。あゝも込み入つた場所で、よくも人間は生きて行けるものだな、と嘆息した。
　都心の道路も同じやうに混沌として、何処もかしこも渋滞だらけであつた。正直、かういう場では暮らせさうに無いな、というのが最終的な帰着点であつた。
　それにしても、相も変はらず昔のことが思い出せなひ。前回の取材時に話した事以上に、未だ確実にそうだつた、と言えるやうな記憶は掘り起こせていなひ。
　少しして、館長さんが来た。
「赤江さん、間もなくださうです」
「はい」
「あら、山田さん」
「何ですか」
「ほら、襟元。内側に入つてますよ」
「え？」
　触ると、右側の襟が内を向いてゐた。
「直しますよ」
館長が手を伸ばす。
――ヤメロ！
ぱしり。一瞬で、手を撥ね退けてしまつた。
「あ！　すみません！」
一瞬であつたが、いつもはかうする事なんて、無ひ。
「あ、いいんですよ。御免なさいね、余計なお世話しちやつたみたひ」
「違うんです。でも、何でせう。一瞬、変な感じが」
「大丈夫ですよ」
　一瞬の、別の自分が、誰なのかが解らなかつた。此れは、自分がしたことであるのは確かであつて、意識下にあつたのは言ふまでもなひ。だけど、その根本に有るものが、暗くて見えなひ。
　何だ？　この気色悪さは？
「すみませんが、少し一人にさせて下さひ」
「分かりました。赤江さんが着いたら、お連れします」
　戸を閉め、一旦部屋に引き返す。テレビでも点けておけば、少しばかりでも気を紛らす事が出来る。取材前には、落ち着いておかないといけない。いつそのこと、此の事も話しておかうか。
　テレビの電源を点ける。ぱちぱちと「りもこん」の釦を押す。テレビというものは、妙に面白い。何せあまりに下世話で、あまりに人間的である。他者の出る杭に齧り付いて、しゃぶり尽して話の肥しにして、時間を持たせるのである。それを視聴者は、間接的に視聴して、同様に愉しむのである。自分自身も其れを楽しんでゐるの

は事実で、それが新鮮に感じられるのである。まあ、さういう番組以外にも面白いと思うものばかりであるが。
さう思つてゐた時、一つの番組に目を奪われた。
「おお」
声をつい、出してしまつた。
しかし、一瞬にして、悲鳴と拒絶へと切り替わつた。頭が、いや脳自体が軋む様に痛んだ。耐えがたい苦痛！躰が言う事を訊かない。唯だ、ひどい震えと緊張に包まれ、何も出来なひ。感情は、恐怖。
――クルナ！　ミツカルナ！
私は、何処かへ行ってしまう。代はるは、ダレナンダ？

※※

やっとこさ、施設の姿が見えてきた。予定から三十分も遅れての到着。この後の予定がない事が、本当に良かったと思う。こういう場合でも焦らずに取材できるのがありがたい。時間が押して焦れば、インタビューの抜けがひどくなって、時には記事にするにも不十分な量で止まってしまうことがある。やっぱり物事は、余裕をもって行うに越したことは無い。子供の頃から、物をどこに置いたか、といったことをすぐに忘れてしまうことが多くて、整理整頓もままならなかった。そのせいで大事なものを紛失することも多く、一番高かったもので言ったら、作って数か月だった高めの眼鏡だったり、音楽プレーヤーなどもなくした。探しても見つからず、他人にも言い出せなかった。結局、大学に通っている時に診断を受け、ＡＤＨＤ(注2)と診断された。結局、治療には精神科医の面談や薬をもらっての治療になって、幾分かマシにはなった。だが、医者から言われた通り、いつもの生活で、常に余裕を持った行動や心持ちを取るのが、最善であると言われていて、自分でもそうした方が良いと思っている。だから、こうやって常に注意を払っているし、手帳とかメモに些細な事も含めて書き留めておく。記者に求められることでもあるから、一石二鳥だ。
施設の駐車場に車を止めると、事務所がせわしなく動いているのが見えた。いつもは何人かが座ってパソコンをカタカタ打っているのだが。
事務室に挨拶をしようと、窓口に向かう。
「ごめん下さい。……すみませーん」
誰もいない。
どたどたとこちらに走ってくる人が見えた。館長さんだった。
「ああ、赤江さん」
血相を変えていた。ひどく焦っている。
「あの、なにかあったんですか」
「あの、実は山田さんが」
戦慄。
「何かあったんですか」
「突然、部屋で叫んで、動けなくなってしまって」
「え」
「今は落ち着いているんですが、気を失ってしまいまして」
「そんな。何か、原因は」
「全く。突然のことで、全くわからないんです」
館長さんに連れられて、医務室へ向かった。
「隣室の方が、山田さんの部屋からものすごい大きな物音がした、様子がおかしいって連絡が来たんです。それで行ってみたら、居間でうずくまって動けなくなって。大丈夫ですか、って聞いたら、ただひたすら『やめてくれ、やめてくれ』とだけ。しばらくしたらふっ、と気を失いまして」
医務室のベッドに、彼は眠っていた。そばに医者が座り、脈を診ていた。
「落ち着きましたね。しばらく安静にしておけば大丈夫でしょう」
「すみません、ありがとうございます」
「いいえ。しかし、突然どうしたんですかねぇ。いつもの彼のことを考えると、間違いなく」
「記憶に関して、でしょうか」
「そちらの方は」
「赤江良平さんです。山田さんの記事を書いていらっしゃる」
「ああ、なるほど。ご苦労様です」
医者に一礼される。返さずにはいられない。
「しかしまあ、とんでもない所に出くわされましたな」
「とんでもない。彼が気付いているか分かりませんが、おそらく記憶が何かしらのきっかけで呼び起こされて、恐怖感や身体的に現れたんじゃ」
「おそらくそうだと思いますね。いわゆるフラッシュバックでしょう」
フラッシュバック。極度のストレスによる複合性トラウマを抱える患者が、そのストレスの原因となったこと、またはそれと関係するような出来事を経験することにより、身体的にも、心的にも防衛しようとして攻撃的態度や行動を取る症状。この前読了した、精神疾患に関する本で取り上げられていた。山田さんの場合は、恐怖心を感じ、そこから逃避しようとしたためのものだろうか。
「赤江さん、とおっしゃいましたか」

「はい」
「今日のところは、申し訳ないがお帰りになってもらいたいのですが」
「わかっています。この様な状況での取材は、山田さんの健康状態を考えれば、良くないですしね」
「ご理解有難うございます」
私だって、一人間だ。このような状況で取材を続ける程の悪人ではない。
「館長さん、どうか山田さんによろしくお伝えください。また取材日程はお伝えします」
「もちろんです」
「とりあえず、一週間ほどは置いた方がよろしいかと」
「わかりました。そう伝えておきます」
山田さんを見やる。表情は柔らかく、眠っている。
その刹那。彼が目を覚ました。ぱっ、と目を開いた。
「山田さん、大丈夫ですか」
「あ、あの……私はいったい」
「大丈夫です。少し気を失っていただけです」
「……ああ、赤江さん。どうも」
一礼。彼は、困惑の表情を浮かべている。
「……ああそうか。この後取材を受けるんでしたね」
「いえ、今日はご気分がすぐれないでしょうから、また日を置いて来ますね」
「そうですよ。山田さん、とりあえず今日のところは」
「いいんです。取材、受けますよ」
「だめですよ。とりあえず今日はお休みになった方が」
「でも、記事をお書きになるんだったら、ちゃんと取材なさった方が」
「上の方には、今日の事情を話せばわかってくれるでしょうから。大丈夫ですよ」
「いや、しかし」
「山田さん、ほら、日を置いて落ち着いてからの方が、話せることも増えるかもしれませんよ。ですから、今日のところは」
「今じゃなきゃダメなんです！」
山田さんが、声を張り上げた。その場にいた誰もが、一瞬だが、ものすごい緊張感に包まれた。
「私が、私自身が嫌なんです。だから、何卒」
ベッドの上で、彼が深く頭を下げた。
……ここまで言われては、返す言葉も無かった。
「……先生、館長さん。部屋を、空けて頂けますか」
館長と医者が、了承してくれた。
「何かあったら、すぐ呼んで下さい。では」
白衣とエプロン姿が、揃って、医務室を出た。
「……本当に、よろしかったんですか」
「なんか、どうしても話さないと、って思ったんです」
「そうですか」
一瞬、沈黙が場を制する。
「本当は、」
「はい？」
「こういうことしたら、記者はバッシングを受けるんですよ」
「バッシング、ですか」
「ほら、取材って、やっぱり取材の受け手を尊重しないといけないですから」
「安心してください。これは、私の希望ですから。万が一何か言われたら、私の希望だったと、ちゃんと伝えてください。分かってくれると思いますよ」
「すみません、なんかご配慮いただいて」
「いいえ」
ああ、いつもの山田さんだ。よかった。
「では、取材の準備をしますので、しばらくお待ちください」

※

「では、取材を始めたひと思ひますが、宜しいでせうか」
「はい」
赤江さんが、ボイスレコーダーを起動させた。
「本日もよろしくお願ひします」
「お願ひします」
「ではまず、体調の方は如何ですか。先程、お部屋で気を失われたという話を伺いました」
「……自分でも、何があったか分かりかねます。テレビを見ていたら、突然、気を失ってしまって」
「もし可能でしたら、何か其の事で気づひたことが在ったら、お話しできますか。気分が優れないやうでしたら、何も言わなくても大丈夫です」
「赤江さんの取材が、少し遅れるという話を聞いたので、テレビでも観て待っていやうと思って、チャンネルを変へていました。その後は、全く」
「さうですか。テレビを観ていたら、何時の間にか気を失った、と」
「はい」
……
「何か、他に在ったら、何でもお話し下さひ」
「……いいえ。何も此れ以上は」
「分かりました。有難う御座居ます。では、前回の取材以降、何か他に思ひ出された事は在りましたか」

「さうですね。あ、さうさう。記憶という事ではないのですが」
「構ひませんよ。自由に話してください」
「自分、暑いのが本当に嫌いだな、と思つて」
「何かあつたんですか」
「一昨日なんですけど、風呂に入つたんです」
「はい」
「それで、浴場、つてのは蒸し暑いでせう?」
「さうですね」
「他の人は愉しさうに風呂に入る。でも僕は、風呂場の蒸し暑さに嫌気がさして、少しシヤワーを浴びてすぐ出たんです。他の人に訊いたら、そこまで蒸し暑いのが嫌いなのは珍しい、って」
「なるほど。何か、其の事で記憶を思い出した、ということはありましたか」
「いいえ。でも、多分ですけど、記憶を失う前の自分の好みなんぢやないか、と」
「成程。確かに可能性はありますね。では、何か他には在りましたか」
「いいえ。それ以外には特に」
「分かりました」
その後、暫く赤江さんと他愛も無い話をした。ふと最後に、
「すみません、こんな話で終はつてしまつて」
と言つたら、
「いえいえ。私こそ、記者だといふのに、こんな話ばあかりしてしまつて」
と、申し訳無ささうにしていた。本心を言えば、こんなに可愛らしひ人なんだな、と思つた。やっぱり、此の人には何でも話して良ひんだ。

「では、これで取材を終はりにさせて頂きます。何か言ひたい事があれば」
「また、取材を宜しくお願いします」
「安心してくださひ、担当は私しか居ませんから」
本当に、安堵した。復た会ひたい。復た、話したいな、と思う人だ。

※※

本当に疲れた。やはり取材というものは、いつになっても精神的な疲労が堪える。話の最中、ぽつりぽつりとくだんの騒動のことが漏れ出ていたのを、なんとか書き留めておいた。
彼の症状は、テレビを観ていた最中に発症した。朧気ながら、話の中で幻聴を聞いたと言った。どんなものだったか、なんとなくでも覚えていないかと尋ねたところ、怒っているような感じだったかもしれない、との事だった。山田さん自身の気持ちはどうだったかについては、死なせてくれという希死観念だったらしい。こればかりは、精神疾患である可能性が高い以上、彼の言う症状を信じるほかないが、彼が嘘偽りを言うことはないと信じている。そうすると、医者が言っていた通り、攻撃的な方向にはいかなかったもののフラッシュバックの症状とみて間違いないのだろう。
「……でも記憶は思い出されなかったしなあ」
彼の脳が、その記憶を彼自身が認識しようとするのを防いでいる。よほどのむごたらしい内容なのかもしれない。無理に思い出させるのは、やはり避けなければならない。
しかし、あの取材をさせてほしいと懇願した彼の表情。鬼気迫るあの言い方。あの場にいた誰もが、いつもの彼の姿とは正反対だと思ったに違いない。正直なことを言えば、恐怖感を抱いた。
「あれが、本当の姿のひとつのなのでは?」
可能性として捉えておく必要はある。あくまで、可能性として。
「おとうさーん。夕ごはーん」
階下から、娘の声が響いた。時計を見やると、いつの間にか十九時を過ぎていた。
「今行くよー」
携帯だけ持って、下に降りていく。食事の香りが漂い、今日の食事が煮ものだと分かった。
「お、いいねえ」
「ちゃんと作ったよ、今日は」
弓子は、今日も夜勤で帰れない。高校で忙しくしているというのに。娘に申し訳ない。
「悪ぃな、作ってもらっちゃって」
「別にいいよ。お父さんだって忙しいでしょ」
「うん、まあ、ね」
「用意しちゃうから、座って待ってて」
「はーいよ」
あまりに疲れていて、冷蔵庫から飲み物を出すことさえ、面倒に思えて仕方なかった。どさり、と椅子に崩れこみ、勢い余って机に突っ伏す。
彼の姿。本当の姿。仮称に包まれ、いまだ顔を出してくれなかったところに、あの事件だ。やっぱり、彼は山田にあらず、といったところか。真実を探り出すのが、記者たるものの原則。だけれど、彼の真実へとたどり着くことは、はたして最終的に是とされることなのか。フラッシュバックという形で現れたように、彼が彼に内包

される真実を自分で認識することは、果たしていいことなのか。
　記憶が抑圧されるのは、基本的に過度のストレスがかかる出来事によって惹起されるという。すなわち、彼の記憶を失った原因も、やはり彼の避けてきた古傷をむやみやたらに切開することと何ら変わりないのでは？
「お父さん邪魔！」
頭上からの声に、はっとする。娘が、夕食を持ってきてくれていた。
「ああ、ごめん」
「もう、疲れてるのはわかるけど、邪魔にならないようにしてよ」
「ほんとごめんって」
「うん、ま、いいけどさ」
里芋の煮ころがしと、縮みホウレンソウのお浸し。俺の胃腸の事を考えての、菜食主義ときた。ここ数年というもの、胃腸が弱って、がっつりとした食べ物があとあとに堪えるようになった。それを聞いた妻と娘は、それ以降というもの野菜とかを中心にしたメニューを多くしてくれた。二人には感謝しかない。
「じゃ、食べよ」
「おう」
『いただきまーす』
娘の料理は、高校生になってから格段にうまくなってきた。回数が増えたのもあるが、自分でもどうやら上手に作れるようにしておきたいと思っているらしい
「うまいわ」
「よかったー。味付け、ちょっとミスったんだけど」
「そうなのか、全然気にならないよ」
「よかったー。でもいや、良くないわ。次気を付けないと」
「聞いちゃうけど、なに間違えたの」
「醤油を入れすぎちゃったんだよ。しょっぱくない？」
「いや全然。むしろちょうどいい」
「そかそか。でも塩分摂りすぎは良くないからね」
「まあ確かにな。俺の健康への配慮か？」
「私自身のためでもあるかな」
「偉っ。自他のため、ってことか」
「まあそんなとこ」
「感謝だわ。こうも気遣ってくれるの」
「なに、改まって。変なの」
こうやって談笑するのも、たぶんあと一、二年か。紅羽は大学進学を考えていて、地方に行きたいと言っている。一人暮らしは、ほぼ確定している。まあ、ここまで料理が出来るなら、ほかの家事もそつなくこなせるだろうから、生活は心配していない。だが、離れるという事が、正直言ってしんどいのである。一度この話をしたら、
『寂しがりなんだぁ』
と茶化された。図星で言い返せなかったのは、言うまでもない。
「……山田さんにも、待ち人がいるんだろうな」
「なに？　例の記憶喪失のひと？」
「そうそう。あ、誰にも喋ってないだろうな」
「大丈夫だよ、心配しないで」
「ならいいや。いやそうそう。今日さ……」
　食事中に、今日の出来事を一通り喋った。もう取材内容を明かしていた以上、明かそうが明かすまいが特段問題なかろう、と思った。
「山田さん、大変だったね」
「本当にな。フラッシュバックって、気を失うほど重篤なものもあるんだって、初めて知ったよ」
「うちはフラッシュバック自体知らなかったけどね」
「そりゃそうだよな。でも、何を思い出したんだろうな。結局、まだちゃんと記憶の内容を思い出した、ってことじゃなかったけど」
二人して、頭を抱え込んだ。
「……あ」
「ん？」
「テレビだよ」
「テレビ？」
「山田さん、テレビを観てる最中に、フラッシュバックだっけ。それになったってことは、原因はテレビ番組の内容になにかあったんじゃないかな」
そうか。何を思い出したかを考えるあまり、ついその直接的な原因を忘れてしまっていた。
「確かに。テレビ番組にトリガーがあったから、こうなった、ともいえる」
「それ以外考えらんなくない？」
「だな。紅羽、悪いけど新聞もってきて」
「あいあい」
居間から、新聞がやってきた。裏面の番組一覧を確認する。
「よし」
一通り確認する。山田さんのフラッシュバックが起きたのは、今日の午後一時半ごろ。一覧の番組は、以下の様になっていた。

チャンネル１：生放送のトーク番組
チャンネル２：健康番組

チャンネル４：ワイドショー(ファッションコーナー)
チャンネル５：ワイドショー(ニュースコーナー)
チャンネル６：ワイドショー(ニュースコーナー)
チャンネル７：グルメ番組(中部地方に関して)
チャンネル８：ワイドショー(ニュースコーナー)

「これだと、７チャンの番組が一番可能性あるよね」
「中部地方、か。結構いいヒントになるかもな」
「でも、他の番組でも、もしかしたらあるかも」
「可能性は捨てきれないな。地方のニュース、ってことも
あるし」
「あと最近だと、ニュースコーナーとは名ばかりで、地
方の紹介とかしてるかもしれない」
「うーん、やっぱり、直接確認するほかないか」
「でも気を付けてね」
「え？」
「山田さんに直接聞くんじゃなくて、お父さんで見当を
付けて、それとなく聞かないとだめだよ。またフラッシ
ュバックを起こしたら大変でしょ」
「そうだな。明日で番組を確認してみるか」
「そうしなよ。私も平日の番組、観てないから知らない
し」
「だな」
決まりだ。番組に関して、遠回りに、かつしらみつぶし
に聞いてみるほかない。だが、だが。
「確実に、彼の本当の姿に、近づいていけてる」
「正念場だね」
「うん、だな」
……あれ。今俺は、娘に調査の手伝いをさせていなかっ
たか？

「あ、おい」
「なに？」
「あんまり、首突っ込むなよ。俺の、仕事だからな」
「でも、気づけたのは誰のおかげかな？」
「うぅっ」
それを言われたら、何とも返せない。
「……いいか、口外するのは、絶対ダメだからな」
「分かってるよ。大丈夫」
「よし、ならいい。じゃ、おれ上に戻るわ」
「飲み物持って行きなよ」
カップにコーヒーを淹れてくれていた。
「ありがたく。サンキューな」
「うん。がんばってね」
「お前もちゃんと勉強しろよ」
「わかってるって」
「じゃ」
「うん」
コーヒーの白い湯気が、カップを伝わる熱が、真相に近
づいているという興奮が、身体を包み込んでいる。
「このまま、進んでいいんだよな」

注１：１９８８年の就籍許可申立事件では、記憶喪失者
について、新しい戸籍を与えることを家庭裁判所
に申し立て、元々の本籍が認められないことを確
認してから就籍許可が与えられた。現在も記憶喪
失者の就籍についてはこの判例が用いられてお
り、許可後に申立人はその通知から１０日以内に
申請しなければならないと定められている。

注２：注意欠陥((欠如)・多動性障害(Attention-
deficit hyperactive disorder)のこと。明確な
症状診断の定義が定まっていないなど、診断の点
で曖昧さがあるものの、基本的に『精神障害の診
断・統計マニュアル第5版(DSM-5)』によると、
以下で後述するような症状が、
・１２歳未満(ただし、一般的には６歳未満まで
の早い時期としている)までに
・６か月以上継続して、
・複数の状況下(学校、自宅、公共の場など)で、
・ほかの精神疾患で説明できないような状況で、
・多い頻度で、
・日常生活に支障をきたす程度に、
見られることが特徴とされる。
①不注意(inattention)
簡単に気をそらされる、細かいことに集中でき
ない・ケアレスミスが多い、話しかけられて
いるのに聞いていないような様子、指導に従
わず課題などを達成できない、問題点や目的
を構築出来ない、長期的かつ精神的負担を伴
う行動を避けたり嫌う、必要行動を忘れる、
日常的な物事を忘れる　など

②過活動(hyperactive)・衝動性(inpulsive)

そわそわ・貧乏ゆすり、長時間座っていられない、不適切に出歩いたり走り回る(小児性に顕著)、落ち着いて物事が出来ない、早口で喋る、質問を言い終わる前に回答する、自分の番が来るのを待ちきれない、他者の行動を妨げる　など

昨今では、「大人のＡＤＨＤ(Adult ADHD)」も正式な精神疾患のひとつとして認められた(２０１５年版のDSM-5以降)。この特徴としては、②よりも①の症状が多くなること、②に関しては内面的なもの(これは「内面的な落ち着きのなさ(inner restlessness)」と呼ばれる)に変化することが特徴的である。

※参考までに以下に詳細をさらに記す。

・現在もＡＤＨＤの根本的な原因はわかっていないが、脳の一部の部位の機能不全、神経代謝の低下、食事、睡眠、特定化学物質などが仮説として立てられている。

・治療法も多岐にわたり、心理療法(患者自身の気づきと、その行動的実践をサポートする認知行動療法など)、社会的方法(患者を囲む環境への配慮)、薬物療法(メチルフェニデート製剤やアトモキセチンなど)がある。

※ＡＤＨＤの診断基準については、米国ＣＤＣ(アメリカ疾病予防管理センター)の公式ＨＰを参考にした。
(https://www.cdc.gov/ncbddd/adhd/diagnosis.html)